

魅力の 果物たち

そのおいしい食べ方

天野 秀二

杉本 正子

上林 雅子



東京新聞出版局

魅力の
果物たち

そのおおいに食す
江苏工业学院图书馆

天野藏秀書章

杉本正子
上林雅子

魅力の果物たち
そのおいしい食べ方

Printed in Japan

定価1,500円
(本体1,456円)

平成2年7月10日 第1刷発行

著 者 天 野 秀 二
上 林 雅 子
杉 本 正 子
発 行 者 山 田 春 夫
発 行 所 東京新聞出版局

東京都港区港南2ノ3ノ13

中日新聞東京本社

電記03 (471) 2211 (代)

ダイヤルイン (740) 2674

F A X (458) 0689

振替 (東京) 5-5497

印刷・製本 図書印刷株式会社

落丁・乱丁はお取り替えいたします

© 1990 Shuji Amano, Masako Kanbayashi,

Masako Sugimoto

ISBN4-8083-0361-2

はじめに

いま、日本の市場には内外の珍しい果物たちが、それこそ年がら年中出回っています。

豊かなる国、日本の市場を目がけて、四季のない熱帯の果物はもちろん、四季が正反対の南半球の果物たちも押し寄せてきます。秘境シルクロードからさえ、果物は入ってくるのです。

現在、果物の輸入は、オレンジを除く九九・九%が自由化されています（オレンジは九一年、オレンジジュースは九二年解禁）。ということは、もうどんな果物も自由に入ってきているということです。もちろん病気や虫のついてるものを除いてですが。問題のある果物は、植物防疫法という掟で輸入がご法度になっているわけです。

輸入できない果物でもそれがきわめて美味だったり、珍しかったりしたら、日本で栽培してしまおうということになるものもあって、金に糸目をつけず、それらの珍果の育つ環境（温室など）を作ってしまう、そういう施設によって、ご法度の国の珍果も栽培され始めています。

それでも飽き足らず、輸入も施設栽培もできないシュガー・アップル、竜眼、ジャックフルーツなどの珍果は、産出国で冷凍され、コールドチェーンでちゃんと日本に入ってくるのです。

かくして植物防疫法はあるとしても日本人のグルメ志向は、肉類や魚、野菜だけでなく、果物の世界でもますます進み、スーパーでも百貨店でも、専門店になるとさらに大きなスケールで、ほとんどの方が目にしたこともない珍しい果物まで、四季の感覚もおかしくなりそうな、カラフルでさまざま

な形で、ズバリと勢ぞろいしています。

そして、国内で亜熱帯に属する小笠原諸島や南西諸島でも、地域開発や一島一村一品運動の旗印を掲げ、熱帯果樹の栽培が進んでいます。例えば小笠原諸島では「東京都産トロピカル・フルーツ」を合言葉に、各種熱帯珍果の生産を進めています。

ところが日本では昔から、菓子とは果物が始まりでした。いまでも水菓子といえは果物のことです、生で食べることが多かったのですが、諸外国では東洋でも西欧でも、加熱・調理してデザートにもお料理にも使うので、そのための珍果もいろいろ入ってきていますから、それらの果物をどうやって食べるかを知って実行することも、人生の楽しみ方のひとつになってきました。

そこでこの本では、どんな国からどんな珍しい果物がきているのか、その素性や素顔すしょうはどんなものか、味の特徴や食べ方など、ひと通りを説明することになりました。果物にかかわるさまざまな珍しい話題を私とともに、気鋭の若いお二人がお目にかけます。諸国あの味この話というわけです。

おもな珍しい果物二十九点のほか、十数点の新顔も加えてあります。さらに外国のスポーツ選手の独特の工夫になるスポーツ・ドリンクやフルーツ・ケーキ類の作り方もご紹介し、アメリカ、イギリス、フランス、スペインなどのしゃれた旅のエッセイに果物をからませ、映画や文学の名作にも出てくるいろいろな果物の話題を集めた、いわば果物天国がここにあります。

天野 秀二

魅力の果物たち 目次

● カラー絵

● はじめに

第一章 映画や名作の中の果物……5

上林雅子

女房の顔へグレープフルーツ……6 ●「赤い靴」とグレープフルーツ……8 ●バナナとUボート……11 ●刑事とレモネード……13 ●いちごと「恋人たち」……17 ●りんごと二つの事件……19 ●スイカと大統領暗殺……21 ●果物は果物でも……23 ●文字通り「ビーチ州」……26 ●「そそる」果実とは……28 ●バーモントのりんご……31 ●ロビンとマリアン……35 ●パイヤといちじく……38 ●果実酒さまざま……46 ●M・トウェインとP・セザンヌ……49 ●珍味!? フルーツパット……52 ●秋から冬の街頭で……55 ●合性のよい肉といちじく……58 ●「櫨」と楊梅……61

第二章 スポーツと果物……64

上林雅子

マラソン選手の「秘密兵器」……65 ●その秘密はバナナに……67 ●研究家ジョン・ネーバー……71 ●ここにもジュースの効用……73 ●M・アリのジュース……75

第三章 果物アラカルト……78

天野秀二

太平洋越えた国光と紅玉……79 ●第二のトヨタになるか……87 ●イチヨウに精虫がいた……91 ●ニュートンのりんごの木……96 ●マクワウリかハミグワか……101 ●種子談義さまざま……105 ●世界じゅう柿は……117 ●神様になった果物……120 ●邪馬台国は九州である……125 ●夏ミカンもまた……131 ●楽園のアダムとイブ……135 ●メロンの王とぶどうの王……139 ●いまや果実酒時代……147 ●パンのみに生きた人たち……152 ●ギネスも驚くアボカド……156 ●「雄無用」の果実……162

第四章 珍しい果物たち……165

天野秀二

●ドリアン……166 ●マンゴ……170 ●マンゴスチン……172 ●チェリモヤ……172 ●レイシ……173 ●ババコ……174 ●タマリロ……175 ●キワノ……176 ●ペピーノ……177 ●ランブタン……177 ●パッション・フルーツ……178 ●カクタス・ペア……179 ●フエイジョア……180 ●ハミグワ……181 ●シュガー・アップル……182 ●ピンロージ……183 ●ゴレンシ……184 ●レンブ……184 ●アセロラ……185 ●ササップ……186 ●シークワシャー……186 ●プシュカン……187 ●ブラッドオレンジ……188 ●マメーリンゴ……189 ●ホオズキケープグーズベリー……189 ●サボテ……190 ●バナナハート……191 ●ザクロ……191 ●ラカンカ……192 ●その他の国内で栽培されている熱帯果物のいろいろ……193 ●ピンボン、エッグフルーツ、スターアップル、セイロングーズベリー、ケガ

キ、インドナツメ、オオバイチジク、ナンカ、ホウライシヨウ、ナンヨウザクラ、ビワモドキ、ジャンボラ
ン、ピタンガ、タマリンド、ランサ、サントール……その他……197 ●日本の山野にみえる昔ながらの果物……198

第五章 ヨーロッパ果物紀行……201

杉本正子

衰えぬ大英帝国の栄光（ハロッズ）……202 ●イギリスりんごの三姉妹……206 ●これぞイギリスの味（アフタヌー
ン・ティー）……210 ●女性たちに大もて（いちじく）……214 ●ベリーの宝庫イギリス……218 ●市を訪ねませんか（素
顔のロンドン）……223 ●黒すぐりの食前酒キール……226 ●残照の中のグラナダ……230 ●セザンヌのりんご（エクサン
ブローアンヌ）……233 ●クルミと紅葉（グルノーブル）……236 ●パリの朝市の楽しさ……239 ●熱帯の花々、巨大なパ
イヤ（マデイラ）……243

●カラー口絵の果物料理の作り方……247

写真提供 新宿高野

第一章

映画や名作の中の果物

女房の顔へグレープフルーツ

ジェームス・キャグニーの苦い思い出

小柄でどこかコミックな童顔だったジェームス・キャグニーは、ギャング役をやってニヒルな味をよく出していましたが、その彼がシカゴのやくざを演じて好評だったのが、「民衆の敵」(一九三一年)でした。鼻が少々天井を向いたあの顔を、思い出して下さい。

ところでこの映画に、グレープフルーツが登場します。それが何と、女房メエ・クラークの饒舌(じょうぜつ)に頭にきたキャグニー、「少し黙っている」とばかり、女房の顔へ二つに切ったグレープフルーツをグシャッと押しつけたものです。いまから五十年以上も前のこと、当時のアメリカは猛烈な女性上位時代ですから、この容赦のないシーンは、アメリカ人にとって大変なショックだったといわれます。そこで後日談もできるのですが、以来キャグニーにとって、女をいじめて平然としているギャングが当たり役になりました。

これは実話の下敷きになっているのですが、その実話というのが、ハイミー・ワイズというシカゴのチンピラヤクザの話で、ワイズが情婦と朝食をしていたところ、彼女が際限もなくしゃべり続けるので、うるさい! とばかり彼女が作ったばかりのオムレツを、その顔にエイッと押しつけてしまっ

たそうです。

これを映画にとなったのですが、オムレツじゃあんまり（最近はそのくらいのこと平気でやるシーンがテレビでは登場しますが）、きたならしいというので、グレープフルーツに代えたというのです。ワイスたちのその後はわからないようですが、キャグニーの方はそうはいかなかった。

「何しろ、あの映画のあと、私がレストランに行くと、必ず誰かがボーイに命じて、私の席まで、グレープを届けさせるんだよ。いやもう、それ以来グレープフルーツを見るのもうんざりだったネ」

届けさせたファンの心理もさまただったでしょう。当時のこと、むろん、よくやった！ オレは溜飲^{りゅういん}を下^{くだ}げたぜ、というのもあったでしょうし、よくもレディーにあんなことおやりになったわね、というのもあったかもしれません。うんざりするはずです。

顔でグレープを「食べた」クラークにも、現実に「話のつづき」がありました。彼女当時、自分のご亭主とモメていて、憎みあったあげく離婚してしまっています。

ところがそのころ、この「民衆の敵」の上映館に、まるで定期券を持ってでもいるように、毎日通ってくる客がいたそうです。それが、クラークとケンカ別れした当のご亭主だったのです。

彼は決まって、彼女が顔にグレープを押しつけられるシーンの直前に、計っていたように入ってくると、そのシーンだけ見て、そこが終わると何とも気持ちよさそうに出て行ったそうです。

当時はこれは、映画史上始まって以来と騒がれたシーンだったのですが、スクリーンのキャグニーに喝采^{かつさい}を送った男性諸氏は、元ご亭主同様、少なくなかったようです。

「赤い靴」とグレープフルーツ

映画評論家はそこところが気になって

いまでこそ、グレープフルーツは別に、珍しくもないのですが、日本で“市民権”を得たのはたかだかここ二十年のことで、それ以前はこの果物、日本では誰も見たことがなかったのです。いまや食後のデザートに、横割りにしたグレープを、スプーンですくう食べ方は、日本中に定着してしまっています。

戦後間もなく上映されたのが、イギリス映画「赤い靴」。“総天然色”などというふれこみがピッタリ、荒廃した日本の戦後のことです。当時の日本映画は“白黒”が普通で、そのときに美しいカラーで登場したのですから、大きな話題になりました。色も美しかったし、本格的なバレエがふんだんに見られたし、それにあの主役モイラ・シアラーの美しかったこと、とオールド・ファンはいまでも、往時を懐かしみます。

物語りはアンデルセンの同名作品にヒントを得たバレリーナの悲恋物語で、バレエを取るか恋人を取るか、ヒロインのバレリーナが、つらい二者択一に苦しみながら踊る——というのがクライマックスなのですが、そのとき彼女をいじめ抜くのが、バレエ団のマネージャー、アントン・ウォールブリ

ユック。

彼のホテルでの朝食シーン。ストイックなその性格を表わすため、メニューは果物とコーヒーだけ。その果物がグレープフルーツだったのです。

封切られたのが昭和二十五年ですから、まだそこらじゅう焼け跡だらけで、建っているのは粗末なバラックばかり。希望に燃えてはいても、毎日の食事さえ十分ではなかったのです、そんな果物などたいていの日本人は見たこともなかったはずです。「進駐軍物資」がハバをきかせ、リグレーのガムやタバコのラッキーストライクはあこがれの的だったといえます。それはともかく。

マネージャーがスプーンを入れるそのフルーツ、ザボンのように大きく、黄色くて（ちなみにグレープの母はザボン、父はスイートオレンジです）、真横にカットされ、お皿の上に鎮座していました。彼はそれに、ギザギザ・スプーンで切り込みを入れ、真っ白く砂糖をかけて、いとも鮮やかに食べてみせたわけです。「そんなシーン、あったかなあ」と、オールド・ファンの一人はいつていました。がある高名な映画評論家は、この場面をじっと見ていました。そしてその「芸術的な食べっぷり」に、いたく感銘を受けたそうです。

あれは、何という果物だろう、それにあのへんなスプーンは何だ、ああいう食べ方をする果物ってあるのだろうか……。自分もさっそく真似をして見たくなったのですが、果物の正体は誰に聞いてもさっぱりわからない。あれは西洋夏ミカンさ、とか、まだ日本にない果物だよ、とかいい加減な返事ばかり。

やっとのことで、あれはグレープフルーツといって、東京なら果物専門店の高野か万惣へ行けばあ

ると教えてくれる人に会い、さっそく飛んで行ったところ、なるほど映画の中のとそっくりなのがあり、喜んで買って帰って、さああの通りにとやってみたが、ウォールブリュックがやったようにはうまく行かず、筋をつければ汁が顔に飛んでくる、スプーンの砂糖もドサッと落ちるで、苦労したとか。

その後その人、ムキになって何と二十回近くもこの映画を見に通い、なお彼のようにには粹に食べることができないとのこと。でもそれだけ、ウォールブリュックの演技が見事だったということでしょう。

バナナとUボート^{ウー}

海の男たちの救世主になったフルーツ

二十年ほど前までは、トロピカル・フルーツの代名詞として人気を独り占めにしていたバナナですが、最近ではすっかり影が薄くなり、その凋落^{ちようらく}ぶりは少々気の毒なほどです。

しかしそのバナナにも、戦時中ドイツ軍の危機を救うような大活躍があったのです。それを証明してくれるのが、西ドイツ映画の大作「Uボート^{フー}」です。

タイトルにもなったUボートとは、第二次世界大戦中に数多くの連合軍の艦艇を魚雷攻撃して海底へ葬り、大西洋狭しと暴れ回ったドイツの小型潜水艦のこと。全長は六十メートルながら幅はわずか六メートル。物好きの友人がジェーン海軍年鑑などで調べたところによりますと、アメリカ海軍の現役潜水艦では、オハイオ級が百七十メートルに十・八メートルですし、ベンジャミン・フランクリン級ですと百二十九メートル×九・六メートル。むろん排水量も多く、オハイオが一万六千六百トン、フランクリンが六千六百トン。いまの日本ですと、「ゆうしお」級が二千四百トンで七十七メートル×十・五メートル。

戦時中ですから、潜水艦は常に隠密^{おんみつ}行動をとります。つまり、海底暮らしが長くなる。Uボートの狭い艦内にたくさんの魚雷や機械類と同居する窮屈さ、狭さは容易に想像がつきます。

この映画に登場する「U 96」の場合も、艦長以下四十三人の乗員が、コンパクトな船内での生活をするのですが、キッチンなども当然ながら、設備だけはなんとなしにある、という具合。そして長い海中生活ですから、掃投が長くなり勝ちで食料の補給は難しく、やがてしだいに底をつき始め、映画の中でも、炊事兵は立場上、カビだらけのパンをほじくって、食べられるところを探すようなシーンが出てきます。

男だけの、緊張の連続。寝てもさめてもただ狭い艦内。そこへ食料が不足してきて、若い兵士たちは、空腹にさいなまれ、錯乱状態の一步前まできていました。

そのときスペインで、幸運にも補給艦からバナナを手に入れました。兵士たちの喜びよう。当然ながら、三度三度、バナナ、またバナナです。でもカビたパンよりずっとまし。それにバナナは栄養価が高いのです。

疲労を取り、ミネラルのバランスを保ち、持久力をつけるカリウムやビタミンCが多いうえ、消化もよいので、こんなときにはまさにうってつけだったのです。あとで出てくるマラソン・ランナーのように、バナナを食べてスタミナを得るのは、最良の方法の一つのようです。

そういうえば、グアム島で発見され生還した横井庄一さんも、ルバング島から奇跡の生還をした小野田少尉も、命の糧として毎日のように野生のバナナを食べて、生き延びたといえます。まさにバナナこそ、生き残るための果物の代表といえそうです。

ともあれ、こうして飢えをしのいだU 96の乗員たちは、再び士気を取り戻し、任務についたのです。

刑事とレモネード

通い合った『男の友情』

「刑事ジョン・ブック／目撃者」（一九八五年）は、刑事殺害事件を描いた第一級のサスペンス映画ですが、お話の筋は筋として、それより私たちを驚かせ、強い印象を与えたのが「アーミッシュ」の存在でした。

アーミッシュとは、米ペンシルベニア州の片田舎^{いなか}に、いまでも文明社会から離れ、厳格な戒律に従って暮らしているキリスト教のプロテスタント派の人たちのこと。一八世紀の初頭、創始者のスイス人アマン（H.Ammann 一六四四—一七三〇）に率いられて、ドイツ・ライン川の流域から、信仰の自由を守り通そうと、アメリカに渡りました。以来永遠の平和を願うため、外界とのパイプは持たず、自然と生命あるものを愛し、素朴に生きてきました。

あかりはランプ、水は井戸、電気も自動車も使いませんから、いまでもなおテレビやラジオとも無縁で、祈りと農作業の毎日を送ってきました。集落内外の交通は馬車により、自給自足の生活を続けています。

昭和天皇もお寄りになったウィリアムズバーグは、開拓当時の町を保存して、維持管理は当時の服

装の人たちがするという、いわば観光用の「アメリカ版明治村」ですが、ここは生活の本拠として、昔からの一切をそのまま受け継ぎ、守っているのです。

西欧文明の先端を行くはずのアメリカ社会に、いまでもこの、タイムトンネルの向こうにあるような社会が現存することは驚きです。むしろアメリカ草創のとき、欧州から新大陸へ渡るといいうのは、それぞれの故郷や祖国を捨てるわけですから、それなりの理由がありました。目的がありました。その人たちの中にはこういう、信仰を守ろうとした集団はまだあって、たとえばソルトレーク州のモルモン教徒の人たちは、いまでも菜食（卵と牛乳は除いて）と禁酒禁煙を守り、立派な都市も大学も持っています。アーミッシュの人たちの生活はそれよりさらに徹底したものです。

映画ではこの平和な「隔絶された」世界に、一人の刑事ジョンがやってくることによって巻き起こされる波乱と文明批判を、浮き彫りにして行きます。

集落の外で殺人が起きます。たまたまそれを少年と母親レイチェルが見ていました。二人をアーミッシュの村へ、ジョン刑事が送ってくるのですが、ジョンはそのとき現地で撃たれ、村へ無事着いたもののその傷が悪化し、そのまま村に留まることになってしまいます。いわば「途方もない異端者が暮らすことになるわけで、やはりそれを喜ばない村人もいたわけです。

大分元気になったある日、ジョンは村の暮らしにとけこもうと、一軒の納屋づくりを手伝います。ここに一人の青年ホッチライトナーが登場します。彼は少年の母レイチェルが好きでした。しかしレイチェルの心は、いまやジョンに傾いています。ホッチライトナーもそれに気づきますから、内心穏やかではありません。